

港南の地理と歴史

港南(こうなん)は東京都港区の町名(品川区ではない)、品川駅の東側、ほぼ全域が埋立地
現行行政地名としては港南一丁目から港南五丁目が設定されている。
北で芝浦および海岸、南で品川区北品川および東品川、西で高輪、東で東京港を挟んで対岸に台場と隣接する

- 徳川時代の品川は江戸郊外、東海道一番の宿として栄えた。品川宿は今の北品川辺り。幕末に黒船が来航し、江戸を守るために天王洲アイルあたりに第四台場が計画された。
- 明治時代になり、明治5年に新橋―横浜間に鉄道が開通。繁栄していた品川宿近くに駅建設計画だったが、品川宿の人々の反対があった。品川駅は、品川区ではなく当時は辺りな港区高輪辺りの海に面した場所(現在の品川駅の場所)にできた。
- 昭和に入り(1926年～)品川駅東側の埋め立てが始まる。昭和20年位までに人工島が完成、工場やアパートが建った。
- 昭和20年代後半に、駅西側が開発され、ホテル・商業施設が整う。
- 平成(1989年)に入り、駅周辺の業務用商業ビルの開業が加速。港南・芝浦・天王洲アイル地区にマンション建設が相次ぎ周辺の様相は一変した。旧国鉄操車場跡地の再開発が品川駅港南口を激変させた。
1999(平成10)年、品川インターシティ(A～C棟)、つづき2004(平成16)年、品川グランドcommonsが竣工。
その中央に都会の森、品川セントラルガーデンが出現した。
- 2003(平成15)年、東海道新幹線品川駅開業、名古屋・関西方面へのアクセス向上、都内有数のビジネス街となる。

内陸側に港南一丁目と港南二丁目、高浜運河を挟んで海側に港南三丁目と港南四丁目、さらにその海側に京浜運河を挟んで港南五丁目が所在する。港区の台場の飛び地を除けば港区の最南端に位置し、東京港の重要埠頭の一つである品川埠頭を擁する。

町域内には戦前より東京市・東京都の施設(東京都下水道局芝浦水再生センター・都建設局の倉庫・都再生油工場・都家畜飼育場・都芝浦屠場など)が立ち並び、品川駅に接しているわりには長い間人通りのほとんどない寂しい場所であった。しかし、貨物ターミナルや新幹線車両基地(旧東京第一車両所、1992年移転)の跡地再開発がはじまってからは品川インターシティ、2003年に品川グランドcommonsがオープンし、オフィスビルや商業施設が建ち並ぶようになり、また東海道新幹線品川駅が開業したことで名古屋・関西地区とのアクセスが向上したこともあって、企業が次々と本社を移転し、現在では都内でも有数のビジネス街となった。そのため、品川駅において、朝のラッシュ時は駅から港南口方面の企業へと出社するたくさんの会社員で駅通路や歩道が埋まり、港南口側から駅を利用する場合、日中に比べると改札口に到達するだけで数分ほど余計に時間が掛かることがある。港区であるが、地域内のビル・マンションなどに、品川駅にちなんだ「品川」を名乗る施設・建築物が多い。

また近年再開発によるタワーマンションの建設ラッシュが進んでいて、湾岸戦争とまで言われるようになった。これは昨今の不景気により企業が負債圧縮のため、数多く所有していた倉庫などの敷地を手放し、不動産業者などに売却したためだと言われている。このため、現在では人口の増加も著しい地域となっている。

